

視野を広げる造形活動2017

佐藤 有紀

SATO Yuki

本稿は本学で実施されている教員免許状更新講習『視野を広げる造形活動』の実践報告である。この講習のテーマは、「子どもたちの自由な表現活動を支えるために必要な保育者・教育者の視点を改めて考える場」を提供することであり、今回2017年度は、前年度までの内容の中でも最も造形活動の基本となる「クレパス（オイルパステル）による描画」に焦点を当て、改めて造形表現の根幹について考えてみる実践を試みた。受講者は現職の保育者・教育者であることから、この毎年の講習は、大学教員側の立場からは現在の保育・教育の現場の造形指導に関する傾向や現状を知ることのできる貴重な機会となっている。本論ではこの講習の実践内容と受講者の感想から、今後の保育教育における造形活動についての問題点や、指導のあり方について考察した。

キーワード：保育、造形活動、表現、描画、素材（オイルパステル）

1. はじめに

夙川学院短期大学では平成21年（2009年）から免許状更新講習を開講しており、筆者が造形の講習を担当してから今年度（2017年）で9回目になる。この講習では『視野を広げる造形活動』というテーマで、現職の保育士、小学校、幼稚園教諭が子どもたちに寄り添いながら楽しく表現活動を行うためのきっかけとなるような内容を企画している。筆者の担当講座ではこれまで基礎的な様々な画材（鉛筆・木炭・クレパス・墨・水彩絵の具など）を準備し、その画材の多様な表現方法を子どもの目線で再体験し、それを新たな造形活動に展開する実践を行ってきた。今回2017年度の講座では、その造形活動の中で用いる画材を敢えて一つに絞り、「描く活動」に焦点をあてた活動内容を考え、実践した。

この講習の実践結果と受講者の感想から現在の

造形指導の問題点、造形表現に対しての考え方、また保育・教育の現場で子どもたちと造形活動を行う際に必要な視点を改めて考察したい。

2. 本講習の内容について

(1) 事前アンケートとその結果

講習内容は事前に受講者対象にこの講座に期待する内容についてのアンケートを行い、これらの要望を考慮しながら設定する。

以下はアンケート回答（抜粋）である。

（講座に期待する活動内容）

- ・ 新しい造形活動の中から今後の教育、保育に活かせるものを学びたい。
- ・ 現在1, 2歳児の担当をしているが、技法にとらわれず五感で表現し感じることで活動を知りたい。
- ・ 造形活動からあそびにつながるものを学びたい。
- ・ 身近な素材で幼児が楽しんで描いたりつくったり

できる活動が知りたい。

- ・ 勤めている保育園でも造形活動がマンネリ化している為、目先の変った造形活動を学びたい。
- ・ 作品展に向けていろいろなアイデアや個人、協同の作品のヒントになること（技法など）教えていただきたい。
- ・ 子ども一人ひとりの個性を伸ばす保育 自身の知らない造形方法を学びたい。
- ・ 子どもの表現の幅を広げられる考え方や子どもの見方を学びたい。

（指導方法について）

- ・ 造形表現の指導法（子どもたちのイメージが膨らむ指導法）を学びたい。
- ・ のびのびと表現できるような指導方法を学びたい。
- ・ 自由な発想を引き出す方法が知りたい。
- ・ どのような配慮、言葉がけが必要か知りたい。
- ・ 年少児にはさみの使い方、のりの塗り方などを分かりやすく説明する方法が知りたい。
- ・ 手伝うポイントを教えてほしい。

（造形作品の評価・ことばがけについて）

- ・ 評価のポイントが知れたらうれしい。
- ・ ある程度出来上がったものの予測を持ちそれに近づけるような言葉がけになりがちである 子どもの発想を大事にして広げてあげられるような活動をこの講座で学びたい。
- ・ 子どもの自由な発想を大切にするために、言葉がけには気をつけるようにしているが、言葉がけの有無やタイミングはいつも難しく思う。
- ・ 子どもが創ることが楽しくなるような一人ひとりにあった言葉がけ 環境設定ができるようなヒントをみつきたい。

（苦手意識の克服）

- ・ 自分の中で昔から苦手意識を感じている。自分のスキルアップに向けてイメージをひろげ、形にするための方法 子どもたちが楽しめる技法が知りたい。
- ・ 造形に興味のない子や苦手と思っている子どもでも楽しく取り組める活動が知りたい
- ・ 造形活動 特に絵を描いたり、デザインをしたり

ということが苦手という意識が強いので少しでも苦手意識をなくしたい。

これらのアンケートの回答をみると、活動内容については、子どもたちの興味を引き、創造力を引き出すことのできる新しい技法や知識を求められていることがわかる。また造形指導の導入とことばがけ、こどもの作品の評価について問題意識をもっている受講者が多くみられた。その他、造形活動に対しての保育、教育者自身の苦手意識をどうしたらよいか、という意見も多数あった。

昨年までの講座では、受講者の要望に答えたいということもあり、できるだけ様々な素材（画材）を用いて造形活動を行うことで、それらの魅力を新たに発見し、実感することをねらいとしていた。

しかし今回は、目新しい素材や技法、アイデアを紹介するのではなく、敢えて使用する画材を一つに限定して、その素材との関わりを深めることで保育・教育者自身が改めて「表現」とは何かということを考えることのできる内容にしたいと思った。

そこで、扱う画材を保育・教育の現場でもなじみの深い「クレパス」一つに限定した。この「クレパス」を使用する理由は、次に述べる。

（2）使用画材 「クレパス」について

クレヨン・クレパスは幼児や子どもの造形活動でもよく使われる素材である。今回使用したのは大学の授業でも教材として使用している「サクラクレパス」である。（図1）この会社のホームページの商品説明をみると「クレパス」は商品名であり「クレヨン」と「パステル」の長所を生かした描画材料で、一般名称は「オイルパステル」である。この画材の基となる、クレヨンは19世紀にフランスで開発された。日本では大正時代の自由画運動の時代に広まったが、その当時のクレヨンはのびが悪く、描画に向かなかった。そこで子どもの描画に適したものが開発され、それが今回取り上げた「クレパス」である。その特色は「や

わらかくのびがよい」「混色が美しい」「重色ができる」「油絵風のタッチにできる」とある。



図① サクラクレパス

このように子どもにも扱いやすい定番の画材ということで、本学でも図工演習や造形表現の教材として使用している（図①）が、学生がこの「クレパス」を使う様子を見て、絵が上手い、下手以前にこの画材の特質を活かしきれていないことが以前から気になっていた。

図②、図③の絵は本学の保育内容・造形表現Ⅰの授業内に学生がクレパスで描いた「虹」の絵である。子どもの描画に最適な効果を発揮するように改良されたクレパスであるが、力が入っていない希薄な線で描かれているものが多く見られる。

（図②上段）クレパスは消しゴムで消すことができないので、失敗を恐れる結果このような表現になっていると考えられる。



図②「塗り方・強弱の違い」

また虹の色が、全くの自分の感覚に従って適当に塗られ、色の調和がとれていないものも多く見ら

れた。（図③）



図③「配色の違い」

三原色の原理を感覚的に理解していないこともあるが、クレパスでも、塗り重ねや混色ができることを体験的に理解していないといえる。クレパスの色を重ねた経験がないということはクレパスでの混色の感覚も備わっていないということで、色の性質に対しての意識が低い学生が多いことを改めて実感した。

（3）クレパスによる実技講習のねらい

では、子どもたちは、この画材を使ってどのような活動を行っているのか。保育、教育の教材として一般的なものとされているこのクレパス（オイルパステル）であるがその使用頻度や使用方法は年齢や施設によって様々であろう。上記の学生の描いた虹の作品を見て、育ちの中での描画あそびの経験の差は感じられる。

現在の保育、教育者は子どもが「絵を描くこと」や表現活動についてどのように捉えているのであろうか。この講習ではクレパスというシンプルな画材を改めて掘り下げ、その特質を味わいながら素材と向き合い、ものをつくるという表現活動について考えたい。

3・実技講習の実践

「視野を広げる造形活動：午後の部」

開講日：2017年8月26日（28名）、27日（28名）、28日（29名）

時間：13:20～16:50

場所：夙川学院短期大学 図工教室

画材：クレパス オイル 画用紙 ケント紙など

1. 講習内容についての説明
2. 活動1
クレパスの描画あそび
3. 活動2
クレパスの描画を用いたポップアップカードの制作
4. 鑑賞

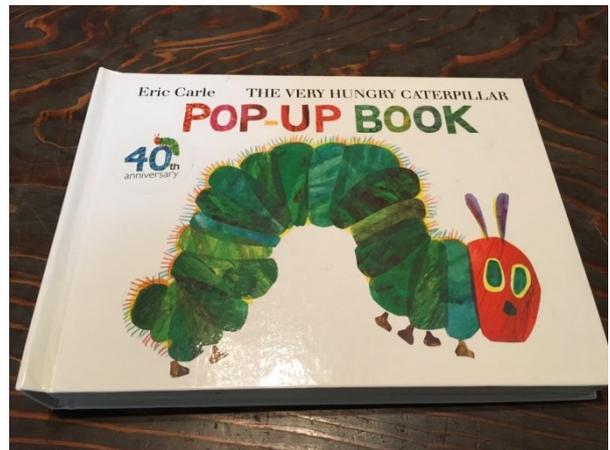
（1）講習内容について

この講習は描画あそびから、作品を作り上げていくことで構成している。ここでは全体の作業工程のイメージを伝えるために「はらぺこあおむし」の作者が行っている絵本作りの手法を紹介する。

この絵本の作者、エリック・カール氏は、作品を作る際、大きな白い紙にスキージーという長方形の大きなヘラ状の道具を使って、アクリル絵の具をのばし、沢山の模様のある紙を作る。そして偶然にできたカラフルな模様の紙を画面のイメージにあわせてカットし、それぞれの組み合わせによって、一つの絵にしていく。

この作業のながれの前半の活動は、仕上がりを想定した計画的なものではなく、純粹に素材あそびの楽しめる活動である。また、想定外の効果も期待でき、仕上がりを気にしないで何度もやり直すことができるので、「描くこと」に苦手意識をもつ人や子どもでも楽しく行うことができる活動である。

今回の講習（活動1）では、この絵本作りの手法を参考に、素材の模様の紙をアクリル絵の具ではなく、クレパスを用いて制作（描画あそび）し、その活動に重点を置く。また、（活動2）ではその描画あそびの展開として、その紙から「見立てあそび」の要領で形をつくりイメージを發展させ、できた色面を用いて違う形態の作品（ポップアップカード）制作に展開する。



図④ 参考作品：『はらぺこあおむし』作エリック・カール（pop-up book）Eric Carle

（2）活動1 クレパスの描画あそび

a 「塗る」

まず、クレパスをしっかりと塗ってみるという活動を行う。16切り画用紙画面を様々な色でしっかりと塗りつぶし、カラフルな色面を作る。

この「塗る」という作業では、クレパスの特色を味わうために、「素材の伸びや感触を感じながらしっかりと塗ること」に気持ちを集中する。素材に不慣れであったり、苦手意識があったりすると、硬いパステルをうっすらと塗るような使い方がちがちなが、ここでは作品の出来を気にせず「塗ること」に注意を促す。ここでは具体的な何かを表現をするのではなく、ただ好きな色で画面を埋めることに集中する。色数も形も制限はない。

作業に力がこもるとクレパスが折れたり、塗り

すぎてカスが粘土のように紙についたりする。子どもの活動でもよく起こることだが、折れたクレパスはそれをねかせて使うと太く塗ることができ、クレパスの余分なカスはのばすと不思議なかたちの線が引ける、など、そのクレパスの感触と発色を確かめながら作業を進める。



図⑤ 「クレパスで塗る」

今回もそんな子どもたちの経験を再体験しながらこの作業に没頭していく様子が見られた。この色塗りあそびの結果、それぞれ色とりどりの画用紙（色のパレット）ができた。図⑤

b 「転写する」

ここでは、aの作業でできた模様の画用紙（図⑥）を、新たな4つ切り画用紙に重ね、裏側からカッターナイフの柄やハサミの持ち手、割り箸などで線を引いたり、こすったりしてみる。こうすると模様の紙はカラフルな「トレーシングペーパー」となり、画用紙の表面に虹色の線や模様が転写して描かれる。線を引く道具によって線質は変化し、その効果を確認しながら、自由に模様を重ね描いていく。図⑦

c 「指で伸ばす」

線の描画の次は、aの作業で多色で塗りつぶした紙を破ったり切ったりしながら形を変え、また別の白画用紙の上に今度は表を向けて重ね、直接紙の隅をこすってクレパスを伸ばす。ステンシル技法ともよばれるものであるが、切ったり破った

りして偶然できた形に添って画用紙にこすれて移り、パステル調の風合いに美しく伸びる。この技法は色鉛筆を重ね塗りしているようにも見え、繊細な表現が生まれる。



図⑥ 「多色で塗った画用紙を様々な形にする」



図⑦ 「転写する」

d 「オイル（油）で伸ばす」

クレパスは油性なので、オイルで溶かし伸ばすことができる。これは、油彩の技法で油絵具とオイルパステルを併用する際、オイルパステルにオイルを足して用いるのと同じである。今回の活動は、画材そのものに直接接触ることから、油絵具のオイルではなく、食用の植物油を使用する。クレパスを塗った面に油を加えるとぬるぬると溶け、さらにその上からクレパスで描くと滑らかに溶けながら、少し透明感のある混色ができる。それを指で塗り広げ、他の紙に伸ばし写す、また、この

技法でできた画面に新しい画用紙を重ねて写し取ると、版画のリトグラフのような効果が得られる。

これら a, b, c, d の技法の特質に慣れてきたら、それぞれの技法を組みあわせて自由に様々な模様の紙を作る。作業中は、クレパスの感触をしっかりと感じ、確かめながら、他人の目や評価を気にせず作業の行為自体を楽しみながら行う。この制作は個人で行うが作業環境はグループ形式であるので周囲の受講者とも色々相談したり、話をしたりしながらの自由な環境の中で行われた。講座の前半、1時間が経過する頃には、受講者による様々な形のカラフルな柄の画用紙で教室の机はいっぱい埋まる。図⑧



図⑧ クレパスで作った色面

(3) 活動2 クレパスによる色面素材を用いたポップアップカードの制作

この活動では、上記のクレパス描画あそびで作った模様の画用紙（色面素材）を使い、その模様や形から連想するイメージを立ち上げるという課題に取り組む。これは前回までと同じく、偶然できたイメージをさらに発展させ、一つの立体空間を自由に表現するというものである。今回は「立版古」を制作したが、本講習は、平面から立体へとダイナミックな動きとともに展開する画面を作る、ポップアップカードを制作した。この制作を行うにあたり、前出のエリック・カール原作「は

らぺこあおむし」の飛び出す絵本を参考作品として（図⑨、⑩）紹介した。

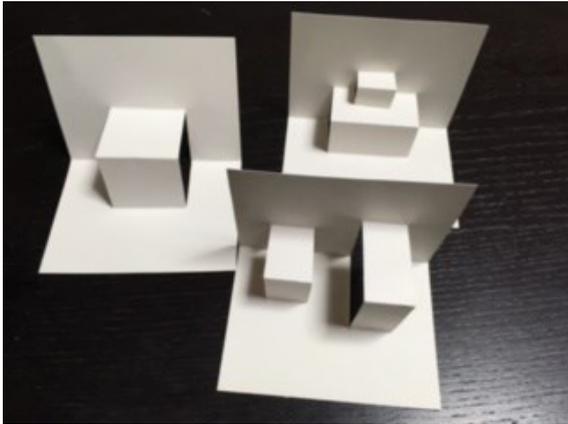


図⑨参考作品：(pop-up book) Eric Carle



図⑩参考作品：(pop-up book) Eric Carle

エリック・カールの絵本はコラージュ技法によって構成されている。平面の画面の中でも十分奥行きのある空間が感じられるが、絵の一部が立ち上がることで、さらに魅力のある空間になっている。この制作でも色面の素材感を更に新鮮に受けとめることができることを期待して、今回は描画をポップアップ形体にする。



図⑪ポップアップカード技法 見本

飛び出すしくみについては最も基本的な技法を紹介した。図⑪

前半の描画あそびで無作為に作った色面は、形を変えたり、見る角度を変えたりすることで印象が変わる。受講者は前半に行ったクレパスの描画を切り抜いたり、折り曲げたり組み合わせたりしながら、新たな空間（飛び出す絵）を作る。描画をじっくり様々な方向から眺め、見立てあそびの要領でイメージを広げていく。また、作品内容（テーマ）や作品の形態は自由とした。



図⑫ポップアップ技法によって画面を立ち上げる

このポップアップカード制作は前半の描画あそびとは違い、具体的なイメージを作るということで、頭を悩ませている受講者も見られたが、試行錯誤を繰り返し、それぞれの表現に没頭している様子が見られた。時間に限りがあるため、少しあ

わただし作業になったが、普段子どもたちと関わりのある仕事に就いている方々ということもあり、発想の柔軟な発想によるユニークな作品が沢山できあがった。それらの作品は、一つのクレパスという画材を利用した様々な平面素材が、受講者それぞれの表したいイメージに形を変え、見ごたえのある空間を作り出していた。

以下に受講者による完成作品をいくつか紹介する。(図⑬⑭⑮⑯⑰)



図⑬ 受講者作品『かお』



図⑭ 受講者作品『ふしぎなせんたくき』正面



図⑮ 受講者作品『ふしぎなせんたくき』横



図⑯ 鑑賞の様子



図⑰ 受講者作品 『パパのおひざだーいすき♡』



図⑱ 『カラフルすいぞくかん』

(4) 鑑賞

毎回、本講座での活動の振り返り、まとめとして鑑賞の時間を設けている。ここでは、時間の都合と受講者数も多数なことから、作品をギャラリースペースとした作業台の上に設置し、お互いの作品を鑑賞する形式をとっている。

完成作品の横にタイトルと作品のコメント用紙を置き、受講者それぞれが他人の作品をみてまわり、一言コメントを書きこむ。自分の作品についてのコメントをもらおうと改めて自分の表現を客観視することができる。クレパスの表現の違いやそれを生かした斬新なアイデアを、今後の活動の参考にしたい、と自分のカメラで写真をとる様子もみられたが、カメラの画像で作品を見ると、また作品が違う印象で見えるという気づきもあった。

4. 講習を終えて

講習後、受講者から今回の講習について聞いた意見をもとに活動の内容について振り返ってみたい。以下は講習後の感想の抜粋である。

○今回の活動内容『クレパスの描画あそび』について

- ・ 子どものころから慣れ親しみ、日々保育の中でも触れているクレパスという、たった一つの画材で多彩な技法や表現方法が広がるのが、純粋に楽しく集中して活動ができた。

- ・ 画材（クレパス）などに直接手をふれてみる楽しさ、面白さを体験した。
- ・ クレパス一つでこんなにもたくさんの遊び方があることを知った。
- ・ スクラッチ技法以外であれほど楽しめるとは思わなかった。
- ・ 日ごろ「絵を描く」ということだけに重点をおいていたのではないかと改めて考えることができた。
- ・ クレパスは手が汚れるのであまり好きではなかったが、思い切って子どもの気持ちに戻ってカスマで指で伸ばすと、色がきれい、どこまで伸びるのだろう、などと考えることができて楽しかった。
- ・ まず自由にクレパスを使って色をぬることがすごく楽しかった。ふだんの指導で「この色を使って顔をぬります」ということが多いので自由に好きなように塗るという楽しさを子どもたちにも体験してもらえたらと思った。
- ・ 今まで技法ごとに単体で絵を描かせたり、遊んだりしてきたが、今回の用にクレパスだけの技法を組み合わせて作品を作ったものでも、様々な表現ができることに本当にびっくりした。いろいろと考えたり工夫したりしてとても楽しかった。この楽しさが子どもたちに必要なんだなあと改めて感じた。
- ・ 画材（クレパス）は絵の時間のときだけに 絵をかくためだけにつかいましょう、終わったらすぐにしまいましょう という風に教えていた。こずったり、のばしたりして楽しめる指導の仕方もしていきたい。
- ・ 頭の中では描画あそびが「あそび」とは思ってもどうやって楽しくあそぶ活動にむすびつけることができるのか、わからなかったが、そのためには保育者とその遊びの楽しさをしらないといけないし、なんでも経験が大事ということがよくわかった。
- ・ 今回の（クレパスで）具体的なものを描かないという活動は上手くかかなくてはいけないというブ

レジャーがなく、自由に楽しく、いつのまにか集中していた。実際にないものを描くことはある意味「ん〜」と考えこんでしまうことではあるが、きれいな模様、柄が次々に出てくることで絵の意味、かたちにこだわることなく造形活動に取り組む経験ができた。

これらの感想からはこの講習の主題である「一つの画材（クレパス）としっかりと向き合い、素材そのものと対話しながら造形活動をする」と、で改めて、新鮮な楽しさを経験することができるとことを確認、体験できたことが伝わってきた。またどのような活動でも子どもたちに造形あそびを提案する保育・教育者自身がまずそのもののことをよく知り、楽しさを実感していることが大切である、という意見も多くみられた。また、多くの保育者は毎日の生活やあそびの中で子どもたちが感じたことをのびのびと表現してもらいたいと考えていることは以下の感想からも伝わってきた。

○今後の造形活動について

- ・ 最近こどもたちと絵や作品で表現をするときに「間違えた」と何度も描き直しをしたり、失敗を恐れ「描けないから、しない」と活動をしようもしない子どもがみられるため、まずは表現を楽しめるような関わりをしたいと改めて感じた。そのためには表現できるための経験をたくさんすることが大事だと改めて感じた。
- ・ ときには自由にテーマにこだわらず時間をたっぷりにとって思うままに満足できるよう保育したいと思った。日々行事等の練習の時間に追われて急がしてしまうこともあるが、子どもたちの心や意欲を受け止め満足できる体験をさせることが大切だと感じた。
- ・ こどもひとりひとりが十分に満足のいく造形活動ができるよう、保育の時間設定を見直していきたいと思った。子どもが自分なりにイメージ

- ・ し、表現するという目標を持ちながらもつい（全員が）同じところを目指す制作になりがちなので今日のように自分なりの制作をしていけるようにしたい。あそびの中で造形活動をしていきたい。

また気になる意見としては、

年齢に応じて手で添えながら絵を描く、クレパスで塗る、指で伸ばすといった一つ一つの段階で楽しめるのではないかと思います

というものもあり、保育者の『素材体験が大切』という強い思いが、「強制」となり却って子どもたちから「自発的に楽しむお絵かき」を遠ざけてしまうこともあることを感じた。

また、絵画指導の難しさについて以下のようなことも感想の中に書かれていた。

- ・ クレパスの描画は各クラスの設定の時間行われることが多いです。体験の絵は「わからへん」「かかれへん」と紙を前に困る子どもも多く、こちらも声がけに悩むことが多いです。かけない子ほど「うまくかかなければ」「はずかしくないように」と思っている様子です。
- ・ 園では子どもたちが経験したことをつなげて絵を描く機会があります。「自由に描きましょう」というと、描ける子もいるのですが、半数の子の手が止まって進まず「先生だったらこんな感じかな」と描くのを見せると描きはじめる子が多いです。（何パターンも描きます。一つにすると全員がそうなるため）そしてその絵画活動をした後の自由時間にお絵かきコーナーで描く子どもたちの絵を見ると全員で描いたときよりのびのび自由に表現していて、自分の指導力のなさを反省します。

表現活動において最も重要な点は、その表現の動機であるが、始めのアンケートでも、子どもの活動の意欲を高めるための導入の方法や、言葉がけに悩んでいるという意見がみられた。これらは共通して、指導者が「～しなければならぬ」

「～させなくてはならない」という意識に囚われていることを感じる。

5. 講習のまとめ

今回の講座では、基本画材であるクレパス（オイルパステル）という一つの素材にじっくり関わる活動によって、活動そのものの新鮮な驚きと楽しさの感覚を取り戻すことを目的とし実践を行った。その結果、多くの受講者から久しぶりに造形活動を楽しみ、子どもの自由な表現を引き出すためには、表現の楽しさを保育・教育者自身が体験しているということが大切だという感想が得られた。そして自分自身の表現だけでなく、子どもの自由な表現を引き出すためには、ありふれたことにでも常に新鮮な感覚（驚く力）を持つことが大切だということを改めて実感した。

新保育士指針の表現の領域のねらいは『感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする』とされており、今回の講習で現職の保育・教育者の声を聞いても『幼児の表現したい気持ちを大切に、幼児の表現がより深く、豊かになるような環境の構成や言葉がけについて考えることが大切』という考えが浸透していることは伝わってきた。ただ今回の実践の全体を振り返ると、保育・教育の現場での表現活動についての考え方、行われ方には、『指導者主体』と『子ども主体』、どちらかに偏ることが感じられた。

『指導者主体』の考え方の中で造形活動を行うと、「到達目標」や「成果」に縛られ、「表現すること」が「目的」「強制」となってしまう、本来の表現の意味や楽しさを見失ってしまいがちである。『子ども主体』の考え方で表現をとらえて活動を導くことができれば、前出の「指導の難しさ」として考えられていることに、解決の道が示されるのではないだろうか。

幼児期の表現活動は、発表会や展覧会に向けて何かを教え込むものではない。本来表現とは、子どもとともに生活していく中からの発見、喜びが

自然と造形活動の表現に結び付くことが理想である。そのためには、まず子どもが主体的に興味を持ったものとしっかり関わることのできる環境と時間の余裕が大切であることが改めてわかった。

6. 今後の課題

子どもの表現活動のために、その活動の見通しを立て、あらゆる可能性に合わせることのできる造形の環境を整えることはとても難しく、保育・教育者養成校の授業内でこれに対応できる力を養うためにはどうすればよいのだろうか。まず、表現活動の手助けとなる造形の知識・技能を身につけることは必須である。ただ、それと同時に、子どもが遊びから物事を学ぶこと同様に、学生が自発的に造形活動に興味を持ち、自分の表したいことを楽しみながら表現するという経験を持つことが必要である。

また、現在、多くの学生にとって子どもの造形活動に触れることのできる機会は保育・教育実習期間に限られている。今後は、更にこどもの活動と結び付きを感じられる授業をつくるためにも、筆者自身も学生と共に、現在の子どもの活動を知る機会を多くもつようにしたい。

5. 引用文献・参考文献

- 岡本美和子・石田敏和 (2014) 造形表現 実践 保育内容シリーズ 谷田貝公昭監修 東京：株式会社一藝社
- 汐見稔幸 監修 (2017) 保育所保育指針ハンドブック 東京：株式会社 廣済堂

ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿は、本学で実施されている教員免許状更新講習『視野を広げる造形活動』の内容に関しての実践報告である。9回目というご経験から今回は基本画材であるクレパスという一つの素材に焦点をしばり表現活動の根本にある「表現の楽しさ」を保育・教育者自身が体験することの大切さを受講生も筆者も再確認できたという事例である。受講生の方々の事前・事後アンケートをしっかりと読み解かれて講習の準備・振り返りをされており、分野を超えてこのような講習を展開していく中で参考になるものである。

(担当：井本英子)